

「袈裟と盛遠」論：人物造型への一考察

下野, 孝文
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10448>

出版情報：文献探究. 18, pp.50-59, 1986-09-18. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

「袈裟と盛遠」論

人物造型への一考察

下野孝文

「袈裟と盛遠」(「中央公論」大7・4)は、直後「地獄変」(「大阪毎日新聞」大7・5)の、また dramatic

monologue (独白体)による作品では「藪の中」(「新小説」大1)の影に隠れて活発な芥川研究の中でも取り残されている作品である。いかに作品を解説していくか、芥川の意識を汲み取るかそのあたりの難解さが論考の停滞に結びついているのかもしれない。そこでこの論考も袈裟・盛遠の人物造型が芥川のいかなる意識を反映しているのかを中心に検討してみたい。

二

この作品においても他の作品同様、比較文学的見地から、作品解明の糸口となる重要な考察がなされている。「袈裟と盛遠」の原典となっているものが、「源平盛衰記」巻十九「文覚発心附東博節女事」であることは周知のとおりである。「源平盛衰記」の袈裟・盛遠の人物像は、宗教色の強い作品世界の内で、自身の恋の成就のために袈裟の夫まで殺害せんとする盛遠の一途な情念と、その身代わりとなってまで貞節を守ろうとする袈裟の意志、各々が強烈な印象を読者に与える。そのような原典の二人の像に、盛遠が文覚に至る

発心譚も加わり後世にはそれを題材にした作品が生まれ、文飾・潤色が加わり伝説化され偶像化され流布していった。当時の巷間の袈裟・盛遠への意識も「袈裟と盛遠の情交」の芥川に対する読者の抗議⁽¹⁾を見れば類推出来よう。長野誉一氏は、両者の詳細な比較の後、原典との相違点を挙げ「これらの違いは、すでに何回か評家によって説かれたように、貞女袈裟を平凡な女に化すために、採られた処置といふことができる」と述べている⁽²⁾。しかし、はたして芥川の造型は、巷間の袈裟伝説を「平凡な女」・「一介の人妻」に化し、更にそこから「偶像破壊」という解釈まで延長してゆけるものなのか、その疑問から論を進めてゆきたい。

長野氏も挙げていますが、原典をヒントにしながら原典の構図を転換させて作品に活かされている事項がある。原典では袈裟の美しさが事件の発端になっているが、この作品では袈裟の容貌の表えが二人の独白の展開に大きく作用している。

原典では袈裟が液を殺すことを言いますが、作品では盛遠の方から言います。

右に示したものは、たんに物語の進行上の素材として変更されたものではない。その転換には作品世界の構築・人物造型に連関してゆく芥川の重要な操作が加えられているようである。

原典では三年ぶりの再開(盛遠側からの偶然的な)で袈裟の美しさが盛遠の狂氣的な行動に結びついてゆくが、この作品では袈裟の

容貌の表えが二人の独白の展開に大きく関わってくる。

その表えが盛遠にとっては肉欲化された袈裟に対する愛の退歩につながり、そして「欲望のための欲望」から情を交わしてしまったことが袈裟に対する煩悶の契機となるのである。また袈裟も何よりも頼みにしていた容貌が表えていたことを盛遠の心に読み取り衝撃を受け、盛遠の蔑すむ心を知りながら情を交わす。そして同様にそこから盛遠に対する煩悶が始まる。二人の独白の経緯を見ればわかるように容貌の表えは外形的なものに留まらず、彼等の内面的なもの崩壊を暗示し、そして二人の内省の契機となっている。つまり袈裟の容貌の表えは盛遠自身の内部の歪みを映し出したものであり、袈裟が盛遠の心に見た、自身の容貌の表えもそれは袈裟自身の内部の歪みに他ならないのだ。三年という時の経過は、彼等の内部を突視させていたのである。袈裟の容貌の表えに象徴される二人の内実は独白によって次第に鮮明になり、更にその独白は、原典の色彩から遠ざかるように独自の世界を創っていく。

原典では袈裟の美しさに魅かれた盛遠は無体な求愛の行為にでる。更に母への情愛から盛遠に身を任せた袈裟は、渡への愛のために自らを犠牲にする。その袈裟の心に盛遠、渡とも出家しその菩提を弔う。そして各々が相手に対する一念によって行動をおこしているのである。しかし、それは愛とだけ呼べるものではない。

たとえば袈裟の身代わりなど、渡のためでありながら自分のためという過ちの消去が潜んでいるのではないか。そこには時代の持つ秩序・倫理・道義などの就縛が存在しているのではないか。そういう疑問から芥川は二人の独白を抱み込む世界を設定してゆくのである。それゆえ「袈裟と盛遠」の独白には倫理的観点からの就縛はない。袈裟は身代わりになることに對して、「あの人に体を任した私の罪の償ひをしようと云う気をもつていた」という内省の後「私は

私のために死なうとする」と言い切り自身の行動にまつわる対他的な要素を削り取ってゆくのである。そこから芥川の独自性が築かれてゆく。

作品における袈裟と盛遠は、理性的であるがゆえにみずからの愛の認識に疎病である。原典の感情の直線的な提示に對して、かえって愛の周囲にある不純物を見極めようとする。しかし、そのことはより純粹に自身の内部を確認しようとする模索でもあるのだ。

また、芥川は原典の袈裟から成される殺害の提言を盛遠から変更した。原典における袈裟からの殺害の提言は、巷間の評価の契機となる「長き契り」を求める盛遠を欺く機知的な行為として描かれている。では、この作品で原典とは逆に盛遠から袈裟になされた殺害の誘いは、たんに巷間の貞女袈裟の像を消し去る操作となったものなのだろうか。

結果的にそういう形となっても芥川の意識は更に歩を進めた新しい二人の造型に向かっている。提言の転換は、二人に彼等を就縛するものからの脱出と意志を付与したことを意味する。だから袈裟は、先述したように夫のためでなくへ私Vのために死を選ぶ。しかし袈裟は自らの命をもって罪の償いを行うような古色を帯びた道義に就縛されてはならない。つまりそれらを捨棄した所から芥川の創造する袈裟が発現し始めるのである。「己が渡を殺そうと言った。」と述べるように、盛遠は自身のために殺害を提言し、そして「自分の夫を殺してまでも、猶人に愛されるのが嬉しく感ぜられる」袈裟も自身のためにそれを受けたのだ。芥川は、原典の二人にまつれる貞節・死心を支柱とする像を消し、更に彼等の内部に在る宗教的道義性からの就縛を解き、対他的要素の削られた世界を構築したのである。

ではそのような世界のなかで、独白を続ける二人を芥川はどのように造型していったのだろうか。

盛達の心に映る自らの醜さを知った袈裟は、その落胆した気持ちから体を任せてしまった。またその契機も「あの人同様、私も唯汚ららしい心もちに動かされてゐたのであらうか」と、原典とは違ひ衝動的な欲望にみている。更に夫の身代わりとなって死を選ぼうとする時、袈裟は自己を詰問する、「果して夫を愛してゐるからだらうか」と。しかし袈裟の心裏の声は、「私は夫の為に死ぬのではない。私は私の為に死なうとする」と応えるのである。そして袈裟の内から液の影は消える。

原典の袈裟は、母衣川のために盛達と共に臥居し、夫のために身代わりとなった。が、この作品の袈裟は、衝動的欲望から盛達と情を交わしへ私 \checkmark の為に死のうとするのである。前者の対他的・献身的造型に対し、後者は自己を自己によって統治する理性と意志を持っている。盛達も同様である。「恋には人の死ぬものかは」という思い、情交後の「今より後は長き契」という一途な心情を持つ盛達は、作品では袈裟への愛を肉欲を美しい言葉でごまかしたものにすぎないと理性的に整理しえる意識の力を持っているのである。

芥川の造型は、たんに袈裟を「平凡な女」・「一介の人妻」と化するような単純なものではない。原典の二人に与えられた貞節と発心という像の消去は、まったく異なる新しい像を形成した。それは自己のために行動し得る意志と内省できる理性を得たということである。それによって作品は、相手を否定しながらそれを触媒として自己の意識を模索するという心理劇として成立し得たのである。

しかし、そういう造型を抱え込む作品世界は、芥川の独創によってのみ形成されたものなのだろうか。それは、芥川自身がこの作品

との関わりを述べているブラウニングから少なからずその教示を得ているように思える。

四

芥川が、ブラウニングにいかなる教示を得たか、出会い、そして具体的に作品を検討することからその関わりを探ってみたい。芥川のブラウニングに対する関心は早く大正二年には始まっている。

ぶらうにんぐはやめに致し候ぶらうにんぐさいくろびぢあによつて読むつもりに候上田敏氏のすきな「彫像と半身像」は何度かよみかへし候外のよりもやさしい様な気が致し候

大2・8・広瀬雄宛書簡

この中の「上田敏氏のすきな『彫像と半身像』」という一節は、芥川自身が「袈裟と盛達」との関わりを述べている「Men and Women」の中の詩である。「うずまき」に刺激され、更に「ぶらうにんぐさいくろびぢあ」(「The Browning Encyclopedia」)によってブラウニングの作品を読もうとする芥川であるが、それら以上に彼にとって示唆的なブラウニングの紹介があったのではないかと思われる。

それは、安田保雄氏⁽⁴⁾によって「藪の中」の素材として挙げられた Lafcadio Hearn の "Appreciations of Poetry" の中の "Studies in Browning" である。氏は、芥川の「余の愛読書と其れより受たる感銘」(大・8・4「中央文学」)の「此の一週間ばかりに床にて読みし小泉八雲氏の Interpretation of Literature 二巻及び Appreciations of Poetry 一巻を近来にない好著と存じ」という一節を傍証に『指輪と本』と「藪の中」との関わりを論証している。しかし、氏も「この講義集が John Erskine の手によって編纂され世に送られたのは、一九一六年すなわち大正五年のこと」と述べている

ように、すでに「袈裟と盛遠」が発表される二年前に "Appreciations of Poetry" は発表されていたのである。

芥川は、大正四年七月、親友恒藤恭の妻家松江を訪れ、その際触発されたのか、翌年にかけてハーンに関する事柄を述べた幾つかの書簡⁽⁵⁾が見られる。そのようなハーンへの関心から考えても、芥川の感銘を受けたという "Appreciations of Poetry" は、「袈裟と盛遠」執筆までに興味深い所を読み、その後の小島政二郎宛（大8・2・23）の書簡⁽⁶⁾にある同書を読んだという状況は、病床にまかせて再読したことを述べたものと考えた方が良いのではないか。自らブラウニングとの関わりを述べるような作品を描きながら「袈裟と盛遠」より二年も前に出版された本を作品発表後一年も後に読むというのも却って不自然な事態ではないだろうか。大正二年にブラウニングへの興味を述べ、後しばらく時を経て、突如として大正七年にブラウニングに対する高揚した気持ちを経ている状況を考えるならば、大正二年から大正七年の間、芥川のブラウニング熱を再燃させるものがあつたと考えた方が自然であろうと思われる。そして、その再燃させる契機となつたものがハーンの "Appreciations of Poetry" の中の "Studies in Browning" だつたのである。John Erskineによつて、発表された "Interpretation of Literature"（大4・11）"Appreciations of Poetry"（大5・12）は、文芸評論家としてのハーンの一面をあらわすもので、"Appreciations of Poetry" の中の "Studies in Browning" もブラウニングの持つ魅力に興味深く解説している。そしてその書に凝縮された魅力が「ブラウニング信者になつた」と述べる芥川の感銘につながつていたのである。

五

ハーンは同書の中でブラウニングの芸術に対して、

ブラウニングは大芸術家であるから、善行と同じく悪行からも全く同じ位良い教訓性を引き出し得る事を了解して居り、そして彼の無意識の目的は、いつも教訓的である。

とその傾向をのべる。またブラウニングの詩の特質についても、彼は常に、或は殆ど常に、一人称で書くのである。彼の詩は例外は少く、殆ど皆独語である。無論、話すのは彼ではなく、誰か他人の靈の「私」である。

と彼の詩が「独白体」を駆使するものであることを説いている。前者のへ教訓的Vというブラウニングの芸術の持つ有効性は、たとえば芥川がふれている "Men and Women" の中の "The Statue and The Bust" の中にも見ることが出来る。この詩は、ファージナンド公爵と貴族リカージの夫人との Platonic な愛を発端に、公爵と夫人に幽閉された夫人と幾つかの心理の曲折を経てその精神愛のまま老人となつてゆく時間の中で互いの心の揺らぎを詠んだものである。

Make me a face on the window there,

Waiting as ever, mute the while,

My love to pass below in the square!

という夫人の公爵へのへ愛への情念から建てられた半身像と

While the mouth and the brow stay brove in Bronze

Admire and say, "when he was alive

How he would take his pleasure once!"

という公爵の死後の賞賛を望む功名心から建てられた騎馬姿の青銅像が残り、二人は近くの教会へ葬られる。そして、その後に加えられるのがブラウニングの教訓である。

I hear your reproach "But delay was best,"

For their end was a crime, " - Oh a crime will do,
As well, I reply, to serve for a test,
As a virtue golden through and through,
And prove its worth at a moment's view!
とへ愛くを含めた人間の行為全般に対する彼の積極的な姿勢を示しながら、更に

If you choose to play - is my principle!

Let a man contend to the uttermost

For his life's set prize, be it what it will.

と述べて、いかなる障害があろうとも心のおもむく方へ自らを導いていく意志の強さを、その姿勢を、肯定してゆくものである。しかしそれは、既成の道徳の蹂躪を、あるいは二人が過ちを犯すことを諷いあげているわけではない。そのことは、つまり、"Let a man contend to the uttermost" というようなブラウニングの「My Principle」なのである。既成の道徳律（宗教的側面からも）を超越した、更にへ大なる法則をもつて人間の内実をつつみ込んでいくとする態度なのだ。それが彼が詩を創作する上での立脚点なのである。それゆえに彼は、様々な状況で異なる型を示す人間の内部をこの手法によって捉え描こうとしたのだ。

このような「Studies in Brauning」にみられるブラウニングの詩篇や芸術観を「袈裟と盛遠」や芥川自身とからめて考えてみると、漠然としたイメージの形でその共有するものを見いだせられよう。そして「独白体」という表現形式以外に芥川がブラウニングの詩篇の中に魅せられる「何か」を探りあてたとするならば、それはブラウニングの芸術に対する意識ではなかっただろうか。

ブラウニングの著作及び生活の凡ての目的は、人間の性格が非常に驚嘆すべき、複雑な、理解し難い物である事と、又、それ

だから、凡ての研究中最も必要なのは人生の研究である事を人々に告げることであった。
このように説かれるブラウニングの芸術に対する意識に、芥川の内実の驕りに焦点をあて、それと彼の問題意識を重ねながら、不可解な人間の心像を描く姿勢とその類似を見ることができよう。ブラウニングの作品からの反映は、菊田茂男氏⁽⁹⁾によって発想における「The Statue and The Bust」の影響、主題・構想における「Porphyria's Lover」の影響が詳細な調査をもって論証されている。

確かにそれらの作品から「袈裟と盛遠」につながる要素を見いだすことは出来よう。しかし、どこまで「袈裟と盛遠」の創作にブラウニングの個々の詩篇が援用されているかを具体的に示すことは難しい問題であろう。

芥川とブラウニングとの関わりは、具体的に表現という形であられる外形よりも作品の内部に潜む意識の面で深く関わっているのではないかと思われる。それは、先に述べた袈裟・盛遠の造型の背後にある道義性からの解放と関わるものである。つまり、二人の独白にたいして倫理的観点からの就縛にとられない自由な告白をなさせる状況を設定したことである。その状況の設定は、先に「The Statue and The Bust」を例に取って整理したようにブラウニングの芸術に対する意識、また創作の立脚点ともなるへ大なる法則Vをもつて人間の内実をとらえてゆこうとする態度と重なるものである。

芥川は、二人を倫理的観点からその是非を説こうとしているのではない。彼は、その原典に根強く広がり袈裟と盛遠の動きを統治しているものを取り除き、自由な告白をなさせる世界を構築したのである。

更に、草稿やメモなどを手がかりに現行の袈裟・盛遠の造型に至る経緯を整理していつてみたい。この作品は、実生活上の転機となる幾つかの局面をむかえながら、心機充実し文学により積極的に対してゆこうとする期に書かれたものであり、構想から発表に至るまで「drama of Kesa」・「亘の日記」↓「三つの独白」↓「袈裟と盛遠」という構想の変遷がなされている。

「drama of Kesa」は、芥川が残した多くのメモの中のものであり、また「大阪毎日は今書いてゐる奴が失敗したので新規に亘の日記と云ふのを書きます」(大7・1・23 岡栄一郎)とあるように、亘(渡)の視点から物語を構築してゆこうとする意図もあつたらしい。いずれが先に構想されたかは判断し難いが、大阪毎日新聞に発表する予定であつたらしい。しかし、その執筆は思うようにならず「私の新規に書きだしたのは十回か十五回の短篇です題は「地獄変」としました」(大7・3・1 薄田洋介)と述べているように大阪毎日新聞へは「地獄変」を発表することになる。更に「戦後まもない頃、東京のデパートで古書即売展が催された際、芥川の「袈裟と盛遠」の原稿が出品されていたことがある。一略一原稿の題が、初めから「袈裟と盛遠」とあつたのではなく、たしか「三つの独白」と題されていたのを消して現在の題名に書き変えられていたことである」(「「袈裟と盛遠」から「藪の中」へ」「国文学」昭47・9)という安田保雄氏の証言から考へるならば、「地獄変」の執筆と重なりながら「三つの独白」という多分「渡の独白」を加えて三者をからめる物語に仕上げるつもりだつたのだろう。しかし、結果的には渡の影は物語から遠い所におかれた「袈裟と盛遠」という現行の袈裟・盛遠の心理劇の形にまとめ「中央公論」から発表することになる。このように芥川の視点は、現行の作品に至るまで四転している

のである。

次に残された草稿を見て見る。中村友氏は、岩森龜一氏のコレクションの中の草稿を挙げて次のように述べている。

この草稿で注目すべきは、衣川が約束を違へ袈裟を渡(草稿の用字は亘)に嫁がせたことを怒り、恨む盛遠の台詞で

盛遠が命をかけた女を人にとられて堪忍なりませうか 広い世界に袈裟は盛遠が愛した ただ一人の女でございます 死なうともこの恋にかはりやうはございませぬ 袈裟ひとりの為には百の叔母を殺さうとも悔いるやうな盛遠だと思召しませぬ
すか

さあ御称名なさいまし 袈裟の為に捨てる命 某は少しも惜しくは思ひませぬ

とあるように、袈裟を真底から愛するものとして盛遠を描いている点であろうか。「源平盛衰記」の盛遠像に近く、その分だけ現行作品と大きく隔たっている。

「「袈裟と盛遠」―その構図に関する覚え書き―」

(「信州白樺」47・48合併号 昭52・2)

確かに氏も述べているように、原典の盛遠の刀を衣川につき付けて袈裟との会見を求める狂気じみた場面を彷彿させる、原典の人物造型を脱し得ていない盛遠の姿を見ることが出来る。また「芥川龍之介未定稿集」(茗荷義敏編・岩波書店・昭43・2)の中にも草稿と見られる「袈裟御前の独白」がある。

a その私がいなくなつてしまつたら けれどもあの方も矢張り私をいじらしく思召してお泣きになるばかりにちがいない
私の心は誰にも知られず心でしまふのか

b あの方が私に恋していらつしやるのはよくしつていられるけれどもあの方がどれだけ私に恋していらつしやつたらう

c けれども私の恋は五月の紫の花のやうにいつまでも うつく
しくのこるのにちがいない さうすれば死ぬのがなんでこは
い事があらうほんに不思議なのは死だ 死ぬばすべてが亡び
るやうに人は思うけれど 私の恋は死んで何時まで(も)生
きるのだ 丁度・・・

これは、原典の袷袋が衣川に残した消息の糸をヒントに描かれたも
のである。この抜粋した文章を見ても現行の袷袋の独白とはだいぶ
趣を異にするものである。原典の貞操を守る貞女・烈女たる像は消
え、逆に盛遠との△愛▽の完結の為に死をむかえようとする。現行
のもののような執拗な心理分析はない。また草稿には、盛遠に対す
る意識の躊躇なく、液は遠く置かれ盛遠に対する心持ちがはっきり
と示されている。具体的にしてみると、bの文章では「あの方」は
液を「あの人」は盛遠を示し、現行の「夫は私を愛してゐる。けれ
ど、私にはその愛を、どうしようという力もない。昔から私にはた
つた一人の男しか愛せなかつた」と重なつてゆくものである。明
らかに袷袋の意識は、盛遠の方に傾いている。更にcの「死ぬばす
べてが亡びるやうに人は思うけれど 私の恋は死んで何時まで(も)
生きるのだ」という文章は、死によって盛遠愛が成就することを述
べたもので、現行の「昔から私にはたつた一人の男しか愛せなかつ
た。さうしてその一人の男が、今夜私を殺しに来るのだ」に延長さ
れてゆくものと思われる。この袷袋の草稿は盛遠のものと比べると
原典からの脱皮がなされているようではあるが、共に原典の残り香
が強く現行のもののような明白な原典離れの意識示がされていない
そこで先に述べた四転した構想の経緯を追いつながら、草稿から現行
の作品への移行を考えてみたい。

「Drama of Kesa」・「亘の日記」は、「袷袋と盛遠」の原型とな
るもので、直接的には「三つの独白」に連関してゆくものと考えら
れる。△Drama▽とされる袷袋の物語は、ドラマである以上現行の
ような心理の起伏のみ綴つたものではなく原典の事件を含む何らか
の動きがあるものとして構想されていたものであろう。「亘の日記」
も日記仕立てであることから、亘の目を通したやはり原典の事件に
関わる物語であつたと思われる。いずれにしても、原典をある程度
ふまえた各々を主人公とする物語を創作するつもりであつたのだら
う。構想自体どこまで現行のものと同なるか推測し難いが、この段
階では袷袋と盛遠の心理の葛藤を独白体で描く意識はなかつたらし
い。次の「三つの独白」という原題の段階になつて「盛遠の独白」
も構想される。草稿も独白体の形式をとつてゐることから、この前
後のものであろう。「三つの独白」から「袷袋と盛遠」への移行は、
匆忙からくる時間的猶予のなさ、原典離れの意識が大きく作用し
てゐると思われる。海軍機関学校の公務に加えて「地獄変」⁽¹³⁾との執
筆の重なりは、だいぶ頭を悩ましていたようである。独自の造型の
ためには、まず巷間に根づく袷袋の貞女・烈女たる印象を消し、ま
た原典の主軸となつてゐる盛遠の発心譚を除かねばならない。前者
は衣川のため、夫のためという対他的な要素を、後者は袷袋が身代
わりとなりおのおす状況を除くことがその手段となる。事実現行の作
品は、その点を考慮した構成がなされている。しかし液を登場させ
るには、どうしても袷袋が身代わりとなるまで筋を進めてゆかねば
ならない。時間的猶予のない状況では原典にある宗教色を払拭して
「液の独白」を描くことは難しかったのであろう。そして「液の独
白」の行方は、具体的な形にならずその模範とした案のまま「藪の
中」の原型となつて芥川の中で留保されていたのではないかと思わ
れる。また「改竄するしないは格別問題と心得ていない」という芥

川の意識は、原典から草稿を経て現行の作品に至る。芥川の造型は、原典の像を払拭する所から始まるのだ。芥川の原典離れの意識は、独自の人物を造型するという意識に拍車をかけ、構想を四転させやうと自身の描く像を形成できたのである。現行の作品は、構成面では時間的抑制が加わり「涙の独白」が形成されず袈裟と盛遠の独白にまとめあげる形となり、内容の面では特に造型においてこの時期彼の内で高まっていた原典離れの意識が十分に反映されたものと言うことができよう。

七

この作品は、言うなれば「女と共に臥居たり」という巷間では捨象された一節から芥川の独創をもって構築された小説である。このような巷間の評価とは異なる視点から創られた小説は、果していかなる評価を得たのだろうか。同時代評として南部修太郎⁽¹⁴⁾の次のようなものがある。

洗練された落ち着いた詞が隙もなく論理化されてゐる。と長所を指摘しながら

因習を快よく碎いた氏の解釈は非常に興味深い。しかし独りこの作のみならず氏の作品の殆ど総ては真に肉迫すべく何物かを欠いてゐるやうな感じが私はする。私は氏の作品に対して、*Intellect* とともに *heart* を求めている。

と作品の物足りなさを述べている。またこの南部の評は、当時芥川と作品全般に与えられた評価でもある。巷間に在る袈裟・盛遠像に對する「新しい心理解剖」という試みの新奇さと功緻な技巧という表現を一義とする芥川の論理的筆致が肯定的な評価の対象となつてゐるのである。言葉を変えれば手慣れた仕事と言うこともできよう。

果して時を経た論考においてもあまりかんばしい評価は受けていない。⁽¹⁵⁾ 吉田精一氏なども

原作の単純な貞女と勇士とが、ここでは近代的な男女として、それぞれ微細な心理を告白の形で語っているが、このような苦心をつまらぬと笑う前に、この時代がこうした偶像破壊を、歴史の新解釈として目新しく感じたのである。

と南部と同じように「歴史の新解釈」としてその目新しさに着目しながらも、それ程高い評価は与えていない。確かに同時期の佳作「戯作三昧」や「地獄変」と比べればそのはざまに在って、力不足を感じないではない。しかしここで考えてみたいのは、吉田氏に限らず袈裟と盛遠の造型が「偶像破壊」という表現で整理されている点⁽¹⁶⁾である。

芥川が歴史の改竄に何の躊躇もないことは、「袈裟と盛遠の情交」の中で述べている通りである。しかし、その改竄を短絡的に「偶像破壊」という表現に結びつけては、芥川の述べてきたような造型に託した意識を黙殺することになる。『源平盛衰記』の逸話は、あくまでも素材としての物語であり、巷間の袈裟と盛遠への意識と自己の作品との落差を計算した上でのものとは思われない。

芥川の残した多くのメモの中に次のようなものがある。

女の愚。——吝嗇。下らぬ道義心。甘いセンチメンタル。

たとえば、このような女性に対する否定的な要素を示したメモを作中の二人の独白に重ねてみるならば、盛遠が袈裟の内に見た情念や袈裟自身の心情の吐露など芥川のそういう意識を読み取ることはできよう。しかし、たとえこれを体現したのが袈裟であるとしても、芥川の意識は、それを作品の底部に据え否定する方向へむかつてゐるとは解せない。

芥川の造型は、もう一步奥へ進み、そうならざるをえない「人間」の姿までいたっているのである。

(1) 「袈裟と盛遠の情交」(『新潮』大7・12)で芥川がその事情について述べている。「東大阪の人からこんな手紙をもらつた」という前置きから、「袈裟は亘の義理と盛遠の情とに迫られて、操を守る為に死を決した烈女である。それを盛遠との間に情交のあつた如く書くのは、烈女袈裟に対しても気の毒なら、国民教育の上にも面白からん結果を来すだろう」という抗議である。それに続けて「袈裟と盛遠との間に情交があつた事は、自分の創作でも何でもない。源平盛衰記の文寛発心の条に、『はや来て女を共に臥し居たり、狭夜も漸更け行きて云々』と、ちやんと書いてある事である」と述べ、更に「改竄するしなは格別大問題だとも心得てゐないが、事実としてこの機会にこれだけの事を発表して置く」と歴史に対する芥川の意蘊を述べて結んでいる。

(2) 長野晋一「古典と近代作家―芥川龍之介」(『有朋堂』昭42・4)
 (3) 坊間に伝えられてゐる「烈婦袈裟」を恋の恨みに生死する一介の人妻に描きなほしてゐる。

宮本顯治「敗北の文学」(『改造』昭4・8)
 (4) 安田保雄「芥川龍之介の比較文学的研究」『藪の中』を中心として(『解釈と鑑賞』昭33・8)

大4・8・14 藤岡蔵六宛
 大5・3・11 恒藤 恭宛
 大5・5・2 恒藤 恭宛

などハーンにふれた文章のみられる書簡が在る。特に大5・3・11恒藤恭宛のものは、「あれ(荒川重之介)とヘルン氏とを材料にして出雲小説を書きたい」とまで述べている。

(6) 大8・2・23 小島政二郎宛
 僕はまだねてゐるんだから好い加減辟易しちまひました君は何日

位ねましたかどうも僕のはたちが悪いんぢやないかと思つて大に神経を悩ませてゐます尤も熱は余りないから床の上で大分書物を読みました就中ヘルン先生の大きな本を二冊読破する事が出来たのは全く風のおかげです
 (7) 大7・9・19 江口漢宛

僕は「袈裟と盛遠」式のものを書きためて Men and Women のやうなものにしたいと思つてゐる計画ばかり色々立ててゐるが一向実行されそうもないこの頃すつかりブラウニング信者になつた。
 (8) 同書の翻訳は、『小泉八雲全集』第一書房昭2・4の第十四巻林並木訳「ブラウニングの研究」を参考にさせていただいた。

(9) 菊田茂男「芥川龍之介とブラウニング」『袈裟と盛遠』を中心にして(『東北大学文学部研究年報』9・10 昭33・12、35・2)
 (10) それは、婚約中の塚本文と二月二日に結婚をしたことであり、またかねての希望であつた文筆業一本にしぼることが大7・2・13 薄田淳介書簡にも見られるように大毎の社友になることが具体化されてきたことである。

(11) 「僕も生活上『一身がきまる』やうな時期へ来た」(大7・2・15 松岡謙宛書簡)という書簡や、(8)の状況をふまえると芥川の意気込みを推察することができよう。

(12) 「僕は新思潮創刊当時の情熱が又かへつて来たやうな気がする一しよにやらうや」中略「新婚当時の癖に生活より芸術の方がどの位つよく僕をグラスブするかわからない」(大7・2・5 松岡謙宛)という「ユードイツ」の感銘にまかせた芸術に対する高揚した意識は、(8)・(9)の状況とも重なつてこの時期芥川がいかに充実した状態であつたかがうかがわれる。

(13) 芥川は、この時期自己の歴史小説に対する意識が明確になつてきた時期である。「西郷隆盛」(『新小説』大7・1)、「昔」(『初出未詳』文末日付大正七年一月)など彼の原典離れの意識を述べた作品があり、また、この作品をはさんで「或日の大石内蔵之

助」(『中央公論』大6・9)「枯野抄」(『新小説』大7・16)など。その意識を反映した作品が書かれている。

(14) 「白木蓮の樹蔭から」五月号創作の印象(三)」「(『時事新報』大7・4・10)

(15) 「盛表記と芥川」の作品とを読み比べてみた場合、前者に安定感があるのは是非もない。一略一かえって蒼然たる古色につつまれて見えるのだ」という長野氏の見解(①と同じ)を始め、海老井英次氏なども伝説を完全に超克しているわけではない、という見解(『別冊国文学』芥川龍之介必携』昭54・2)を示している。

(16) 吉田氏の見解(『芥川龍之介』三省堂・昭17・12)を始め、鈴木美知子氏も「袈裟と盛遠」試論の中で、「この作品において芥川は偶像破壊という手段をもって袈裟と盛遠を描き上げた(『国文白百合』3号・昭47・3)と述べている。

九州大学大学院修士課程

〔49頁より続く〕草にて書たるを假名に直す位ハ、筆工家の持前なれハ、敢問違にも有まじとの答(中略、おのれ少く積にさほり、然らハ一應御話し申べし。先第一省文の字を違ふに、漢人の書来りしハ格別、日本製作の文字ハ、用捨有度物也。足下今雙を双と書、佛を仏と書たるハ能れども、澤を沢と誌し、出をせと誌し、圓を〇と書給ひしハ誤り也。此等の文字ハ倭俗の作る処にして用ふるに足す。又昔といふ字に昔しとおくり、再といふ字に再いとおくり、豫といふ字に豫めとおくり假名を付ること甚見悪し。〔中略〕原書にかかる誤りハなき筈なりとて、引合せ見せける処、昔人彌分らぬ様子にて、是にても讀にかほりたることハ有まじとの挨拶申す、余も興さめて二言を出不す。此話しハ是にて恐惶謹言也。されハ此書も所々に傳はれ、それからそれへと、写本の数重なるに至りなハ、字違ひ假名違ひハいふも更也自他の分らざる事も儘あるべし。最々なげかはしき事になん。

〔注〕奥山四研(四頌とも書く。天保七年版「広益諸家人名録」などに出る儒者井伊四頌」と同人物か)は銀鷲の旧友で、文政末年に同じ谷中瑞輪寺の近所に居住し、また天保八年頃からは銀鷲の寓居していた前田丹後守(上野七日市藩)の本所屋敷の近くに居る。四研作文政十二年刊の「浮世名所図全」下巻を銀鷲の息銀鷲が校訂し、銀鷲が跋文を書いている。銀鷲お得意の座敷図の口絵に再三みかけられる人でもある。